小学校編

問題解決能力としてのコミュニケーション能力の育成に関する研究
―地域社会における問題に取り組む単元開発を通して―

茂原市立中の島小学校教諭
（前茂原市立茂原小学校教諭）　木村（きむら）　大樹（だいき）

1　研究主題について

社会や生活の在り方の大きな変化が予測される未来。そんな未来を担う子供たちには、地域社会の人々や仲間と協働し、よりよい答えを見付け、新たな社会を切り拓く問題解決能力としてのコミュニケーション能力が求められると考え、本主題を設定した。

2　研究目標

地域社会の問題を取り上げ、その問題を解決するプロセスの中で、情報活用能力を育て、指導と評価の一体化により音声言語の学習の質の向上を図りつつ、コミュニケーション能力を高める場を組織することが、問題解決能力としてのコミュニケーション能力の育成に有効であることを明らかにする。

本稿では、コミュニケーション能力の育成を中心に、研究の一端を紹介する。

3　研究の実際

⑴単元計画

第６学年「みんなでつくろう、私たちのまち」
（国語21時間・総合的な学習の時間６時間）

地元のまちづくりについて、市役所や商工会議所の方の要請を受け、単元のプロセスを以下のようにした。①市役所の方等を招いてパネルディスカッションを行い、まちづくりへの思いと課題を共有する。②子供たちで話し合い、解決策を考える。③先のパネラーの方々を招き、自分たちが考えた解決策を提案し、意見をいただく。

⑵手だて

音声言語によって行われる話合いには、「言ったそばから消えてしまう」という特徴があり、子供が自他の発言を振り返りにくく、教員も指導しにくいという課題がある。それを解決するために、「台本型手引き」と「話合い記録」という二つの手立てを用意した。

①台本型手引き

身に付けさせたい力や話合いの仕方のポイントを例示したものである。これを使うことで、「こう進めればいいのか」、「この言葉を真似して使ってみよう」、「こう考えればいいのか」というような具体的な見通しを持つことができた。

②話合い記録

子供たちは、発言内容や収集した情報を付箋紙に書き出し、それを利用することで、分類や関係付けを視覚的に捉え、論点を明確にして話合いを進めた。それを録音して文字に起こしたものが、話合い記録である。これにより、子供たちは、話合い活動を振り返り、合意形成の難しさやグループ・自身の話合いの特徴に気付くことができた。また、教員は、グループや子供の実態を的確に把握し評価することができた。

4　研究のまとめ

愛着のある身近な地域について、人々が集う活気あるまちにするにはどうしたよいか、現状と向き合い、今あるよさを中心に情報を集め、「台本型手引き」や「話合い記録」を活用して話合いを進めることが、コミュニケーション能力の向上につながると分かった。これにより、子供たちの課題に対する切実感や必要性、社会に参加する姿勢も高まった。

小学校編

誰もが空中における身体動作を習得できるはさみ跳びの学習の在り方
ー主要局面に着目した高学年の走り高跳びの教材開発を通してー

香取市立小見川中央小学校教諭
（前香取市立小見川北小学校教諭）江越（えごし）　雅之（まさゆき）

１　研究主題

走り高跳びは、技能習得に個人差が生じやすく、教員からは、特に、空中動作の指導が難しいという声が多く聞かれる運動である。小学校学習指導要領解説体育編には、運動が苦手な児童への配慮例として、「力強く踏み切って体が浮くことを経験できるように」とある。これは、バーを越えることを追究する以前に、しっかりと体を空中に持ち上げる必要性を示唆している。そこで本研究では、走り高跳びの技能を向上させるために、主要局面に焦点を当て技能向上が図れる教材を工夫することで、その効果を検証していきたいと考え、本主題を設定した。

２　研究目標

小学校高学年走り高跳びにおいて、空中における身体動作を習得するために、主要局面での踏み切りから空中までの動作を習得できる教材の有効性を検証する。

図１　局面構造

３　研究の実際

⑴研究仮説

踏み切りから空中までの動作を習得できる教材を工夫することによって、走り高跳びの主要局面の技能が向上するであろう。

⑵研究の具体的内容

これまで用いられてきた平行二重バーや段違い平行二重バーを参考に、どのような技能レベルの児童でも、空中における身体動作を、①高く遠くへ振り上げ脚を伸ばすことができ、②さらに抜き脚の開き方も習得できることをねらい、新しい教材「トライアングルバー（以下ＴＲＢ）」（**図２**）を開発した。これは、支柱から助走側に三角形の頂点を作り、その頂点に向かってバーを設置したものであり、その有効性について検証した。

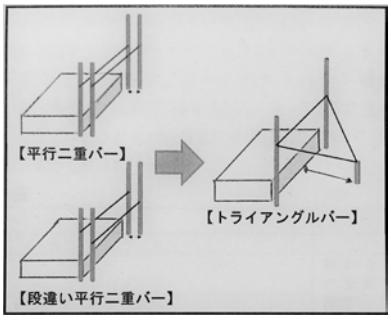


図２　ＴＲＢ

⑶検証結果と考察

ＴＲＢを、①基礎感覚づくりで使用する群、②単元を通して主運動で使用する群、③単元後半の主運動で使用する群、④使用しない群の４種類の授業を実施し検証をした。

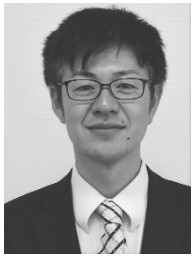
記録の比較では、②と③の群が大幅に向上した。また、技能下位児童の伸び率が高いという結果も出た。脚の開きの変容についても、ＴＲＢを使用した①②③の群と使用しなかった④群の間に大きな差が見られた。児童が、ＴＲＢの有効性について実感していることも、学習カードの記述から推察できた。

４　研究を終えて

ＴＲＢによって、空中局面での脚の開き方の技能に向上が見られた。児童の技能レベル水準に関わらず、ＴＲＢの活用が有効であることが分かった。

小学校編

自閉的傾向のある児童の「考え、議論する道徳」の指導
～「二つの意見」を用いた授業づくりに焦点をあてて～



木更津市立木更津第一小学校教諭　宮越（みやこし）　淳（あつし）

１　自閉的傾向のある児童の道徳指導の課題

自閉的傾向のある児童の道徳指導について、「道徳教育に係る評価等の在り方に関する専門家会議」(2015) では、取り上げたい価値にたどり着くことや、自分のことを振り返ること、話合い活動の難しさ等の課題があり、それらに対して意見の選択肢を用意する等の手立てが有効であるとしている。

２　「二つの意見」を用いた道徳授業

中野啓明(2015)の提唱する「『二つの意見』を用いた道徳授業」は、扱う教材において教師が道徳的価値を含む「二つの意見」を導入部分で提示し、児童は提示された意見のどちらかを支持し、その理由や他方の意見についてどう考えるか発表していく指導方法である。(図)議論の焦点化を図りつつ、自分と異なる考えや見方に触れることを可能とするため、自閉的傾向のある児童に対する道徳指導に有効であると考え、着目した。

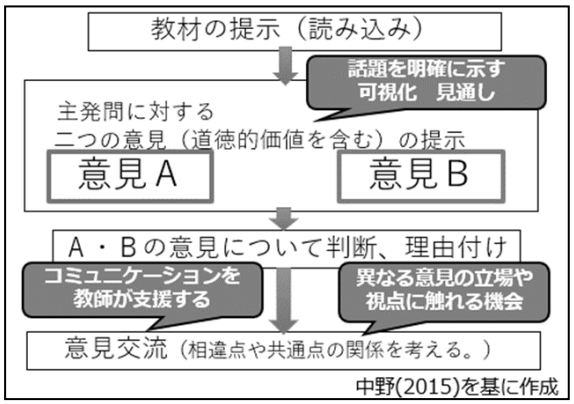


図　「二つの意見」を用いた道徳授業の流れ

３　分析の方法

本研究では、事例児童の発話について、「一面的な見方から多面的・多角的な見方へと発展しているか」「道徳的価値の理解を自分自身との関わりの中で深めているか」という二つの観点から変容を見ていく。

４　検証授業

小学校自閉症・情緒障害特別支援学級に在籍する児童を対象に「くろぶたのしっぱい」（出典：小学どうとく　ゆたかなこころ　２年　光文書院）を教材とし、検証授業を設定した。教科書には教材ごとに「主たる内容項目」と「関連性のある内容項目」が示されており、この二つの内容項目から「規則の尊重」と「善悪の判断」という「二つの意見」を作成した。検証授業では、児童が多面的・多角的な見方に発展し、自分との関わりから道徳的価値の理解を深めた発話が見られた。また、「二つの意見」を提示することで、児童は論点が分かり、話題に沿った議論ができた。

５　研究のまとめ

実践研究では、自閉的傾向のある児童に対し、「二つの意見」によって議論の焦点化を図ることで、道徳的価値を中心とした議論が促されることが明らかになった。また、児童は一面的な見方から多面的・多角的な見方へと発展し、道徳的価値の理解と自分自身とを関係させて捉えることができることも明らかになった。また、本稿では紹介できなかったが、調査研究では、特別支援学級担任が、「考え、議論する道徳」の必要性を認識しながらも、自閉的な傾向のある児童の道徳指導上の課題として、話し合いの難しさを感じていることも明らかになった。

小学校編

小学校の学級担任は学級経営をどのように考えているか
ーリフレクションを通してー

市川市教育委員会学校教育部学校地域連携推進課副主幹
（前市川市立北方小学校教諭）　大野（おおの）　聡美（さとみ）

1　研究主題について

「学級経営の充実」が求められる中、「学級経営」について小学校の学級担任はどのように自身の学級経営観を身に付けていくのか、コルブの経験学習モデル論に基づき、学級担任のリフレクションからその仕組みを明らかにしようと試みた。また、日本の文化・歴史的背景から生じる学級経営の複雑さを考察し、リフレクションシートを用いた学級担任の学級経営力向上について提案した。

2　研究の実際

⑴文献による基礎的な理論研究

「学級経営」を冠した書籍は多く見られるが、体系的・学術的に学級経営研究はまだ始まったばかりの段階にある。柳治男、河村茂雄らの研究では、日本の学級集団には①機能集団的性格②共同体的性格の両方が求められており、特に②について人間関係を基盤に集団の規律や行動様式、学習意欲などを集団の中で形作ることが日本の学級の大きな特徴として挙げられた。

⑵経験学習とリフレクション

経験した事柄をどのように行動選択に反映するのか、コルブの「経験学習モデル」に当てはめると、担任教員の行動選択の違いは省察フェーズの違いによるのではないかと考えた。省察についてはショーンの「行為についてのリフレクション」「行為の中のリフレクション」の考え方を用いて、リフレクションが次の行動選択に与える影響について実際に担任教員への面接調査とリフレクションノートの実践から考察することにした。

⑶実践研究

半構造化面接法を用い、７名の担任経験のある教員から学級経営についてインタビューを行い、内容について分析と考察を行った。また、５名の担任教員とリフレクションノートへの記録とフィードバックによる交流を行い、内容について分析と考察を行った。それらの結果を基に、短時間で効果的なリフレクションができるように、学級経営リフレクションシートを作成した。

3　研究の結果

⑴考察

①担任教員は知識だけではなく、実際の経験から自身の学級経営についての考え、方針を生み出していることが明らかになった。

②経験を省察することで、より良い行動選択に繋げられ、その際、省察を肯定的に行う他者がいてフィードバックを与えられるとより好ましいことが明らかになった。

⑵課題

①十分なリフレクションを行う時間的・心理的余裕が学校現場にはない。リフレクションの効果と重要性についてより広く知らせ、実践するシステム作りが必要である。

②個人内リフレクションを活性化し、より効果的な経験学習に繋げるためには、他者からのフィードバックが有効である。そのためには他者との信頼関係に基づく良好な人間関係構築が日常的に求められる。

※本研究で作成した学級経営リフレクションシート【簡易版】は、県総合教育センターWebサイトからダウンロードが可能。